

渡辺祐子『近代中国とプロテスタント伝道』（東京外国語大学博士請求論文 2006年）より1868年に江蘇省揚州で発生した教会襲撃事件（揚州教案）を考察する前提として、清末の在地知識人が作成した反キリスト教文書を分析した部分。

1860年の天津条約批准以後、同治年間（1862年—1874年）に頻発した教案の多くは、地方読書人が唱導し、多数の民衆が宣教師攻撃に加わるという形をとった。すでに述べた曾國藩がそうであったように、条約の遵守を義務付けられた地方官は、住民感情と条約の内容との狭間で進退窮まる立場に追い込まれることが常であった。

地方読書人のキリスト教理解或いはキリスト教批判は、彼らがその他の宣教師や教会を攻撃目標として書いた様々な掲帖に表されているが、その中でも湖南で出版されたといわれるキリスト教論駁書『辟邪紀実』（1861年、咸豊11年初版）は、広範に流布し、読書人のキリスト教観や宣教師認識に強い影響を及ぼしたとされている。本書は明代以降の多数の破邪論とマテオ・リッチ以来の宣教師の著作等を合わせて合計202に上る参考図書からの引用をランダムに並べ、その間に「天下第一傷人」と自らを名乗る匿名の著者が自身の見解を挿んでいる。儒教思想に基づく具体的なキリスト教教義批判は楊光先（1597年—1669年）著『不得已』の抄録に代弁させており、著者自身がキリスト教の「邪説」に一つ一つ加えている論駁の多くは、性的タブーとキリスト教を結びつけたり、聖の高処にあるキリスト教を賤の極みにまで徹底的に貶めたりする一見稚拙な批判、或いは誹謗中傷である。例えば、下巻の「案証」は、「天主教匪」の隣家の住人や友人、家人の証言から、中国人信徒や宣教師（その中には次章で論ずる洪秀全も含まれる）に関する個別情報が48集められ、「教えに従うもの」は淫乱好色の輩、教会は男女乱交の場、宣教師は女性を捕まえれば性行為を強要する人物としてまことしやかに描いている。

舅に入信を強く勧められた姑が教会に行った際、中の様子を隙間から窺っていた嫁は凄まじい光景を目にした。教主（宣教師）が一鉢の水を部屋に置き、その水を口に含んで噴出すと姑は服を脱ぎ裸になって、教主も同じ様に裸になった。教主は姑と向き合っ、水の鉢をぐるぐる何度も回し寝転がって口から水を噴くという動作を何度か繰り返した後、姑を姦淫した。その後姑は夢から醒めたように服を着て出てくると、全身爽快だ、この教えに是非入るべきだ、私も最初は信じていなかったが、今はお前に勧めると嫁に言い、嫁が物陰から見ていたことを話しても、そんなことは知らないと怒って突っぱねた。（「案証」十三—十四頁を意訳）

ここで言われている一鉢の水とは、恐らく洗礼式で使用されたものだろう。本来は再生の象徴である水が、淫靡な儀式を描くための小道具として効果的に用いられている。キリ

スト教と性的タブーとの関連付けは、全編を通して頻繁に登場するが、批判と中傷は他の側面にも及ぶ。

（入信する際は洗礼に加えて牧師は）餅を割き、それを食べさせ、次いで一杯の酒を飲ませる。これを聖餐を食すという。この聖餐によって頭がぼけてしまい、自ら祖先の位牌を破壊するようになるのだ。・・・病気になっても通常の医薬は得られず、必ず教会の人間が来て鍼灸を施す。婦人も裸になって治療を受ける。もし治らず死んでしまったら、すぐに身体と頭を解剖して病巣の所在を調べる。・・・家で死人が出ると、牧師は死者の親族を追い出して門を閉じ遺体を調べ、こっそり死体の目玉を取ってしまい、膏薬で目を覆う。・・・目玉を削り貫くことについてであるが、中国の鉛百斤から銀八斤を抽出することができる。残った九十二斤は売って原価に充てることができる。ただその銀は、必ず中国人の目玉を取って薬を配合するときそれに加えなくてはならない。（「天主邪教集説」三―四頁）

しかしこうした荒唐無稽とも思える非難に着目するのみでは、著者の憤りを根底で方向付けているものが一向に見えてこないであろう。それを解明する手がかりが次の引用に示されているように思える。

著者は中間の「批駁邪説」の項で、ロンドン伝道会のグリフィス・ジョンの著作『天路指明』を手厳しく論評している。『辟邪紀実』に記された数あるキリスト教批判の中から次の引用を選択するのは、それがプロテスタントを攻撃対象としているからでもある。批評者は次のように述べる。

（グリフィス・ジョンは）言う、この世の人々に国の内も外もない。君子、宰相から士大夫、庶民にいたるまでみな法を犯す人間であると。では聞くが、中国にはこれまで少なからぬ聖君賢相がいた。品行方正な士大夫や庶民も。これらの人々が皆、法を犯す人間の中に入れられてしまうのか。

（グリフィス・ジョンは）言う、かつて孔子は心に正道を抱きながらその道を歩まず、知識がないことを嘆いていたと。またこうも言う、必ずや上帝たる神は人心を感化する。…どの国であれ偉大な聖人や賢人が格物などの方法を用いで人心を正そうとしていることは言う迄もないが、それらは名ばかりで中身がないと。私は問いたい。その教えがどうして孔子に対し礼を失っていないといえよう。またどうして却って孔子を引用して自らの拠り所とするのか。…偉大な聖人や賢人が人心を正す方法は名ばかりだというのが、いったい何を見ているのだろう。

（グリフィス・ジョンは）言う、あらゆる邪教が減び去り、悪事が淘汰され、天

変地異が起きて新しい世界が生まれ、上帝を拝まないものはひとりもなく、皆己のごとく人を愛するようになる、そういう日がやってくるだろう。これは必ずや実現するのである、と。私は問いたい。あらゆる邪教が滅び去るとは、孔孟の教えのことか。佛老のそれは正道から逸脱しているが、かの教え（キリスト教）の邪さが悪辣極まるのには及ばない。

（グリフィス・ジョンは）言う、近年耶穌教の宣教師が中国にやってきて聖なる道を説き、聖書を頒布し始めて五十余年になる。人々は皆国を挙げて悔い改め主を信じるべきだというのに、結果的には信者は少なく信じないものが多い。このことはまた人心が邪で破壊されていることの証拠である。それ故中国人は上帝の律法に照らせば、実に皆罪を有しているのである、と。では聞こう。人心が邪で破壊されている証拠や中国人の罪が三綱五常や名教に見出せるのだろうか。幸いにして信者は少なく信じないものが多いので、このまま中国を駆り立てて妖を皆殺しにすれば、わたしがまた口を差し挟む余地はなくなるだろう。

このように、著者の立場から見れば、紳士層の依って立つ基盤を「神の言葉」によって相対化しようとし、聖人君子をも神の前にはすべて罪びとであるといって憚らないキリスト教の教えは、郷村社会、宗族、家族に至る中国的支配秩序を底辺から切り崩すものに他ならないのである。彼ら自身の秩序、世界観を守るためには、邪説とそれに仕える宣教師をすべて駆逐しなければならない。こうした紳士層の意識が反キリスト教運動に理論的根拠を与え、たとえ分に安んじ中国人の感情に配慮する宣教師であったとしても、それを放逐することが正当化された。そしてこうした紳士層の秩序観、世界観は、揚州教案の広義の原因としてもとらえておく必要がある。